

(一)

易の十翼が、何時、何人によって制作されたかを確定する資料はない。しかし、その制作の基本姿勢を究明することによって、ある程度の限定は可能となるであらう。

易は、本来は占筮のための書であった。占筮のために案出された形が卦画であり、その卦画の性質・意義を説明したものが辞であり更にそれを解説敷衍したものが、易伝即ち十翼である。

卦画は、爻即ち一や二の符号を、六つ組み合わせることによって成り立っている。剛と柔・陽と陰といった対立する意味を持たせた二つの符号を、三つずつ組み合わせることによって、八つの基本の形が得られる。これが八卦である。この八卦を更に組み合わせることによって、六十四のそれぞれ異った形が得られる。六十四の形は、一(陽爻)一九二と、二(陰爻)一九二、合計三八四の爻から成り立っていることになる。

一つの卦画について、それへの説明を加えたものを卦辞又は象辞と

いう。そして一つの卦を成立せしめる六つの一や二の爻各々について、その意義を説明したものを爻辞又は象辞という。これらは本来、単に吉凶を判断するだけの占いの辞であった。そして、あくまでもこの占いの辞は、吉凶を判断するための標準を示したものであり、例文であるにすぎず、これを拠として、その時に応じて最終的な占断をしたものであらう。従って得られたところの卦象の解釈は様々であったであらうことは想像に難くない。又これら卦爻の辞は、易成立当時<sup>(1)</sup>、既に存った亀卜の卜辞や古い占筮家の繇辞を当嵌めたものらしく、占断の基準を提供したものでしかなかったのであらう。

そもそも、卦画の制作は伏羲によるといわれる。<sup>(2)</sup>又六十四卦の作者は神農氏や夏の禹王、周の文王などの名が従来あげられるが、いづれも根拠は稀薄である。卦爻の辞も文王・周公の作だとされるが信すべき根拠もなく、制作者の特定は必らずしもなされていないし、でき得ない。十翼は、これら卦爻の辞の意義を解説敷衍したもののなのである。

易の解釈学としての易伝即ち十翼も、孔子の作るところとせられてきたが、これもまた決して一人の手で成ったものではなく、ある時間

をかけて、復数の人々によって附加されてきたものであろう。既に宋の歐陽修が「周易童子問」を著してこれを疑って以来、多くの研究家の説くところである。復数の人々によって、ある年月を経て作られたであろう十翼は、それではどのような意図のもとに制作附加されたものであろうか。その基本的な姿勢を、各伝に涉って逐條考察し、探ってみようと思う。

十翼は彖伝上下、象伝上下、文言伝、繫辭伝、説卦伝、序卦伝、雜卦伝の七種十篇からなっている。

彖伝は、六十四卦の卦名と卦辭とを説明したものであり、象伝は、六十四の卦象と三百八十四の爻辭を解釈したものであり、文言伝は乾卦と坤卦の二卦のみについて、その詳細な解釈がなされたものであり、繫辭伝は易の理論であり、説卦伝は、易理と併せて八卦の象について説明したものであり、占筮のために作られたような性格を持っている。序卦伝は六十四卦の配列順序について組織的に説いたもの、雜卦伝は又卦の意義について述べたものである。

本稿では、先づ文言伝の乾卦の項についてのみ、その制作の基本姿勢を見ていこうと思う。

文言とは、言即ち卦爻の辭を飾り附益したもの、といった程のもので、実際に道德的、發展的に解釈され、儒家的思想が多く含まれている。この文言伝は、乾坤二卦にだけあって、他の卦にはない。これが成立については、繫辭伝との関連において捉える学者が多い。即ち、本来繫辭伝の中に含まれてあったものが、陰陽の消長変化によって、

すべての現象、事物が成り立つと考え、その二大要因を、天地の根本と考える易の立場乃至古代中国人の考え方から、陽そのものとされる乾の卦と、陰そのものとされる坤の卦とは、易の根本であり、従って特に繫辭伝より独立させて補足を加えたとする説である。或はそうであらう。

## (二)

■ ■ ■ 乾下 乾、元亨利貞。

「元亨」も「利貞」も共に他の卦辭にも使われている。<sup>(3)</sup> 元の字の本義は始であるが、彖伝が「大哉乾元、万物資始」と引申して大と解してより、易中、元の字は皆「大いに」と読ませる。占筮してこの卦を得れば、占わんとする事柄は、「すらすらと滞りなく通じ運んでいく、だからむしろ静かに正しくしている方がよい」という正に教訓的占断の言葉である。文言伝はこれを

「元者、善之長也。亨者、嘉之會也。利者、義之和也。貞者、事之幹也。君子體仁足以長人、嘉會以合禮、利物足以義、貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰、乾、元亨利貞。」

と説明する。卦辭そのものだけを見る限り、「特に作意しなくても、正しく生活してさえいれば、最初から順調に進展するよ。この卦が得られてよかったね」といった具合に教え示しているだけのものであらう。にも拘らず文言伝の作者は、元・亨・利・貞と四つに分解し、一つ一つを働きのある項目として捉えている。

元は本源の意であるが、これを人事に推せば「仁」であって、衆善の根源であり、頭目である。これを体得するならば、人の上位に居ることが出来る。

亨は通暢の義であって、滞ることがないということは善美であるから、禮に合致することが出来る。

利は宜しいということで、陰陽相和して各々よろしき（義）を得ることである。従って、利を専らにしないで、物を利するようになるならば、義に背かず、適うことになる。

貞とは、正固又貞固で、固く正道を守ることであり、すべての物事が存立し得る根幹である。だから、貞固であれば、事に幹たるに足るのである。君子たる者、この四徳を体得実践すべく、常に心掛けるべきである。故に乾は元亨利貞と、特にいうのである。

以上のように文言伝の作者は解説するが、謂わゆる占断の辞からは、かなりかけ離れた解となっている。まさに文言である。しかも、易経の文中、元亨利貞の表現は数か所に見え、乾の卦に限られたものでもない。なおかつ、これとほぼ同文が左伝の襄公九年の條に

「始往而筮<sub>レ</sub>之。遇<sub>二</sub>艮<sub>一</sub>之八<sub>三</sub>。史曰、是謂<sub>二</sub>艮<sub>一</sub>之隨<sub>三</sub>。隨其出也。君必速出。姜曰、亡。是於<sub>二</sub>周易<sub>一</sub>曰、隨元亨利貞無咎。元、體之長也。亨、嘉之會也。利、義之和也。貞、事之幹也。體<sub>レ</sub>仁、足<sub>二</sub>以長<sub>一</sub>人、嘉<sub>レ</sub>德、足<sub>二</sub>以合<sub>一</sub>禮、利<sub>レ</sub>物、足<sub>二</sub>以和<sub>一</sub>義、貞固、足<sub>二</sub>以幹<sub>一</sub>事。然故不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>誣也。是以雖<sub>レ</sub>隨無咎。」

とあって、左伝の文を敢えてこれに当嵌めたものであるかも知れない。

そして、元亨利貞を四つの徳目に分つたのも、孔子の智仁勇を云い、孟子の仁義禮智を云うに倣ったもので、易の占筮が、かなり権威を認められ流行しだした時代に、儒家系統の人々が恣意的に自家の勢力拡張乃至権威づけのために、十翼の各伝を作り出し、専ら義理によって解をなし、所謂聖人の道を顕彰しようとしたものではなからうか。易が、元来は占筮のための書であって、「元亨利貞」も原初的な読み方はともあれ、占筮の辞として読むべきであり、解釈すべきであって、必らず義理を以て解さなければならぬというものでもない。ここに十翼成立に何らかの意図を認めざるを得ないのである。但、文言伝の首章のみにて、一概には言えぬことではある。以下文言伝を逐条見ていくこととする。

初九の文言伝に「初九曰、潛龍勿用、何謂也。子曰、龍徳而隠者也。不易乎世、不成乎名。遯世无悶、不見是而无悶。樂則行之、憂則違之。確乎其不可拔、潛龍也。」と。

乾卦の初九の爻辞は、「潛龍」が形即ち象を言っており、「勿用」はその占解であらう。<sup>(4)</sup> 文言伝は「何の謂ぞや。」と問い、「子曰く。」で応ずる問答体をとって、聖人の、ことに解を托そうと試みている。剛健の勢いを持ち、神秘的な不測の力を有すると考えられ神靈視されてきた龍<sup>(5)</sup>は、又聖人にたとえられる。ともあれ、この爻辞の解釈は、「剛健強運の勢いを本来持つて生れてはきたが、まだ發揮するだけの素地ができあがっていない。だから慎重にせよ。」とでもやっておけばよいものである。ただ占の辞には、かなり教訓的な色彩が濃い。そこで

文言の制作者は一層その意義を自分達の持つ知識の中で説こうとしたのであろう。だからこそ「確乎として其れ抜く可からざるは、潛龍なり。」と云って強調するのである。

九二の文言伝は「九二曰、見龍在田、利見大人、何謂也。子曰、龍徳而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠。善世而不伐。徳博而化。易曰、見龍在田、利見大人、君徳也。」

九二は潛龍が、未だ低い位置ではあるが地上に現れ、活動を開始した象である。そしてその占は、大人を仰ぎ見るように慕い、見習うがよからう、といった程のものである。文言はこの大人を具体的に説明する。即ち乾の九二の爻は、純粹に剛健高邁の氣象を備えてまことに中正である。これを人に譬えるならば、大人にもなるう可能性を持っている。その大人とは、常日頃の言行は虚偽がなく、失策もない。中正で、造次顛沛にもこれに心懸けて、驕慢墮落することがない存在であって、自然に周辺が感化されるような人物をいうのである。だから易に「見龍在田、利見大人。」とあるのは、王者にもなる器量をも備えている、といっているのである、と。

この文言の「庸言之信、庸行之謹、」の一句は、荀子にも「庸言必信之、庸行必慎之。畏法流俗、而不敢以其所獨甚。」「不苟篇」とあり、又中庸にも「庸徳之行、庸言之謹、有所不不足、不敢不勉、有餘不敢盡。言顧行、行顧言。」と同様の文を載せている。これは恐らく儒家系統の、かなり学識のある人々が、自己の見解に先人の既説の文を附益して、易との関係の密接さを主張しようとしたも

のであろう。

九三の文言伝は「九三曰、君子終日乾乾、夕惕若。厲无咎。何謂也。子曰、君子進徳修業。忠信所以進徳也。修辭立其誠、所以居業也。知至至之、可與言幾也。知終終之、可與存義也。是故居上位而不驕、在下位而不憂。故乾乾因其時而惕、雖危无咎矣。」と。

九三の爻辭も、「君子は、一日を精一杯真剣に生きぬくべきである。そうすれば、多少の災厄も回避できる」と教えている。文言ではこれを更に具体的なものに解説している。

「君子進徳修業。」と君子のあり方を述べる。君子たるもの、道德的でなくてはならないし、その道德性を更に進歩發展させ、それを更に具体的に自分の与えられた仕事の上に顯現發揮させなければならぬ、とするのである。「乾」の字は、説文に「上出也、从乙、乙、物之達也、軌声。」とある。軌が音で、この軌は又「日が始めて光を放つさま」と解されている。従って「乾乾」とは、孜孜として努力し、前進あるのみという意味になる。文言はこの「乾乾」は、道德的に乾乾であれ、と主張するのである。そして進徳の方法としては「忠信」、居業の方法を「修辭立誠」と規定する。そうすることによって、人が人として全うできるのであると解説する。これは儒家のかなり完成された道德思想をもって解釈されており、根幹に人間存在の尊厳さと、自然の理法の正鵠とを洞察した、鋭い見解が感じられる。占筮のための易を、より科学的に捉えようとする、一つの方向が十翼制作にはあったように思うのである。

九四の文言伝に「九四曰、或躍在淵、无咎、何謂也。子曰、上下无常、非爲邪也。進退无恆、非離羣也。君子進德修業、欲及時也。故无咎。」と。

「或躍在淵」とは、進むべきには進み、退くべきに退いて耐えることであろう、文言はこの「或」を「上下无常」と釈している。進退の定まらない状態である。これは決して邪惡な私利私欲のためにそのようにしているのではない。そして、この進退恒なき状態は、自分勝手な、利己的なものではない。自己に対する他者を常に意識すればこそ進退を慎重にするのであって、進むにも退くにも、常に進徳修業しつつ、そうすべき「時」を擲もうとするのであるという。

「時」の觀念は、中国の思想文学を通じて重要な意味を持つものであると考える。此処でも、進退は時に委ねられている。前の九三においても「故乾乾因其時、而惕」と言って、「其の時」を重視している。「時」は当然のことながら、処と位とに相即的に關係している。ここでは「時」は、時機、タイミングといった類のものであるが、これを得るには、自然の理法を熟知することと無關係ではあり得ない。そこで先づ人そのもののあるべき姿を知らねばならない。知ることによってその時が得られる。中庸にも「君子而時中」とある。君子にして時に中することができるといことは、人のあるべき姿を熟知しているもの、即ち道徳的に完成されたものが君子である、ということになる。そこで九四の文言は、爻辭を解釈しつつ、平素の君子のあるべき姿を儒家の道徳思想をもつて提示したのである。そして君子になり得てはじ

めて無事安穩に性命を全うできると教えるのである。「非爲邪也」「非離羣也」などの表現も、人の社会性、協調性更には公徳性の涵養を訴えたもののように思える。九四の文言もまた、儒家的要素の学界乃至一般社会への浸透を企図したものではないだろうか。内容が創見ではなく、既説のものを借りて、更に一步を進めた感があるからである。

九五の文言伝は「九五曰、飛龍在天、利見大人、何謂也。子曰、同声相應、同氣相求。水流溼、火就燥、雲從龍、風從虎。聖人作而物覩。本乎天者親上、本乎地者親下。則各從其類也。」と。

「飛龍天に在り」とは、筮する事柄乃至は人物が最高調にあって、何をどうやっても当る。だから、そういう事柄乃至は人物を見習って、するがよい、というのである。これを文言の解釈は、物のすべて同類に相應じ、相感するように、有徳の君子即ち聖人が現れれば、万民一同にその高邁な人柄、その道徳を慕い敬するものである、とする。つまり「飛龍在天、利見大人」の意義は「聖人作而万物覩」である。全てを聖人の事に托して解しようとする余り些か飛躍的で説得力に乏しいが、いづれにしても、道徳的に完成された人物を至上のものとし、それに到達するための方途として儒家の学説が高調され、自家の学説の優位を示さんとする意図が窺えるのである。

上九の文言伝は「上九曰、亢龍有悔、何謂也。子曰、貴而无位、高而无民、賢人在下位而无輔。是以動而有悔也。」と。

亢は、咽喉、頸のことで、転じて「高い」、「たかぶる」等の意である。この爻は、亢極の必らずや悔あるを言ったものである。文言では、

徳なくして貴高にあることを戒めており、と同時に亢極の危険性と中正の尊貴にして安定性のあることを言わんとしているのである。中正中和は儒家の最も尊ぶところである。文言伝は更に続けて卦爻辭を解釈し、最終に乾坤二卦について解釈を施している。

(三)

- 「潛龍勿用、下也。」
- 「見龍在田、時舍也。」
- 「終日乾乾、行時也。」
- 「或躍在淵、自試也。」
- 「飛龍在天、上治也。」
- 「亢龍有悔、窮之災也。」
- 「乾元用九、天下治也。」

初爻即ち初九より上九まで、更に用九（陽剛を用いる道）を補足的に人事に托して述べている。「下也」とは、焦せらず徳を養えということであろう。「時舍也」とは、舍の字は捨てる意とも、「とどまる」意とも解される。高さを望まず低い位置に安んじて、学問修養もって時を待てということ。「行時也」は、前の九三の進徳修業に努めよということであろう。「自試也」とは、力はあるが、果してその力が時のよろしきに適うかどうかを熟慮せよということ。「上治也」とは、聖人の如くであれば、上位にいて治めることができる。「窮之災也」とは、高位にあって傲慢であっては、悔いをのこす。だから、調和の

とれた状態が望ましく、よって仁徳を身につければ、天下はよく平治となる。以上この一段もまた人の処し方を端的に述べたに過ぎず、表現はなはだ抽象的ではあるがいわんとすることは仁徳を修め、義を知ることを教えんとするものである。

更に、

- 「潛龍勿用、陽氣潛藏。」
- 「見龍在田、天下文明。」
- 「終日乾乾、與時偕行。」
- 「或躍在淵、乾道乃革。」
- 「飛龍在天、乃位乎天徳。」
- 「亢龍有悔、與時皆極。」
- 「乾元用九、乃見天則。」

この一段は、自然の運行に擬らえて人のあり方を示そうとするものである。だとすれば、あまり表面的に自家の主張を打ち出せない時代の人の手に成るものではなからうか。(二)で考察した文言伝の表現とはかけはなれたものがあり、かといって占筮家の解釈ではない。しかも前段と共に韻文（○○△印）である。形式内容共に象伝に酷似している。

更に文言伝は云う。

「乾元者、始而亨者也。利貞者、性情也。乾始能以美利、利天下不言所利。大矣哉。大哉乾乎。剛健中正、純粹精也。六爻發揮、旁通情也。時乘六龍、以御天也。雲行雨施、天下平也。」と。

乾の卦辭の解釈である。元・亨・利・貞の働きを説いて、「元亨は物を生じ發育せしめ、各々の働きを發揮せしめ（利）て、しかも利することゝ譽らない」と。更にこの四徳を賛美している。ここでは「元」は「始め」「原初」の意に解され、而も老子の謂わゆる「道」の概念に近い。或いは、道家流の言を参考して解釈したものかもしれない。更に各爻については、

初九「君子以成徳爲行。日可見之行也。潛之爲言也、隱而未見、行而未成。是以君子弗用也。」

九二「君子學以聚之、問以辨之、寬以居之、仁以行之。易曰、見龍在田。利見大人、君徳也。」

九三「九三、重剛而不中。上不在天。下不在田。故乾乾因其時而惕、雖危无咎矣。」

九四「九四、重剛而不中、上不在天。下不在田。中不在人。故或之。或之者、疑之也。故无咎。」

九五「夫大人者、與天地合其徳、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶。先天而天弗違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎。」

上九「亢之爲言也、知進而不知退。知存而不知亡。知得而不知喪。其唯聖人乎。知進退存土而不失其正者、其唯聖人乎。」

と釈するが、九三、九四は單に爻象を論じただけのものである。初九と他の三爻の解とは全く趣きを異にしている。

初九においては君子のあるべき道を「以成徳爲行。日可見之

行也」と述べて、徳を成就して、その成就された道德を日々に実践し、行動の上に顯らかにしなければならないものとする。しかし時を得なければ成徳を行い得ないから、時をよろしく觀察すべきであることを言外に述べている。

九二もまた君子のよろしく學問とその実践に心掛けるべきを論じ、爻辭に道德的意義を与えようとしている。學・問・寬・仁の四要素は「聚之」「辨之」「居之」「行之」ことによって成就する。易に「見龍在田、利見大人」といつてあるのは、これらを実際に行うことを示しているのだ、と釈す。儒家的道德思想の高軌を示すもので、中庸の博學、審問、慎思、明辨、篤行というに同一のものである。

九五また大人の理想的な存在であることを論じ、人の目標とすべきを設定して、九五でいう「大人」が文言伝の制作者の理想とする人物像であることを明言する。即ちその大人とは、天地の徳とも一致し、日月の光明の天地万物を照らす偉大な力とも同じであり、四時が正しく運行するのと同じように規則があり、鬼神の不測の力とも一致する。

上九では亢極の危険なる理由を述べ、仁徳を備えた聖人だけが、恒常の場を保持することを述べ、文言の作者達の絶対優位を闡明しようとする。

以上乾卦文言伝が

一、文体が齊一的でないこと。

一、従つて同一人物によつて書かれたものではないこと。

一、各種の資料が混在している形跡があること。  
 一、内容的には、一部を除いて儒家的要素が強いこと。  
 などが理解できる。

(四)

䷁ 坤上 坤、元亨。利牝馬之貞。君子有攸往、先迷、後得主。利西南得朋、東北喪朋。安貞吉。  
 乾と同じように「元亨」である。

坤は雌馬の如く、柔順の徳、貞節の徳を持つ。然るべき有徳の人に随順する形である。

文言伝に言う。

「坤至柔而動也剛。至靜而徳方。後得主而有常。含萬物而化光。坤道其順乎。承天而時行。」と。

初六、履霜堅冰至。

最初は霜のように履み砕くことできるものもの、さらに増長して、堅い氷が閉さすようになるであろうという爻辞である。

文言伝は

「積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故。其所由来者漸矣。由辯之不早辯也。易曰、履霜堅冰至、蓋言順也。」と。

六二、直方。大。不習无不利。

正直であり、方正である。従ってその働きは大であり、自然の法則、自然の徳が備っているのです、行いが正しい道に合致していたってよろしいのである。

文言は

「直其正也。方其義也。君子敬以直内、義以方外。敬義立而徳不孤。直方大不習无不利、則不疑其所行也。」と。

六三、含章如貞。或從王事、元成有終。

道徳的資質もすべての才能も具わっていても、内に含んで表面には出さないで、貞固の姿を守り通していくべきである。時に表舞台で活躍することがあっても、自分のためにせずに常に人に従ってすれば、事を完遂して、ついにはそれが己のためになる。

文言伝は言う

「陰雖有美、含之以從王事、弗敢成也。地道也。妻道也。臣道也。地道无成而代有終也。」と。

六四、括囊。无咎无譽。

才智をつゝみかくして、何事も慎重にすべきをいったものであろう。文言伝は

「天地變化、草木蕃。天地閉、賢人隱。易曰、括囊。无咎无譽、蓋言謹也。」



## 六五、黄裳。元吉。

黄は、五行の配当では尊位で中央である。従って黄裳は、中和、中庸の徳があつて、しかも、人の下位（裳）にあつて柔順であるということ。そのように謙遜であれば、元吉即ち大いに吉と。

## 文言伝に

「君子黄中通理、正位居體。美在其中、而暢於四支、發於事業。美之至也。」と。

## 上六、龍戰于野。其血玄黃。

下位の者が上位の者に近接しすぎると、力が伯仲して争奪が生ずる。双方に打撃があつて得るところがない。

## 文言伝は

「陰疑於陽必戰。爲其嫌于陽也。故稱龍焉。猶未離其類也。故稱血焉。夫玄黃者、天地雜也。天玄而地黃。」

坤の文言伝を見るに、卦辞乃至爻辞をやはり道德的言辭に言い換えた形で解釈している。乾の卦爻辞を釈するような極端な敷衍の仕方がない。しかしここでも共通して儒家の多くとなえる学説の比重が大きい。例えば、卦辞の文言に、「徳方」「順」「時行」などは又「承天」などといった使い方も儒家的である。「時に行う」とか「天に承く」とかは、天命觀に根ざすものであらう。しかし老子的な柔弱の考え方がないでもない。坤の卦そのものが陰の氣であり、柔順を体とするからばかりではなく「へりくだり、争わない」姿勢が強調される。

しかし概して儒家的道德觀に立つて制作されたことには間違いない。更に初六より上六に至る文言を見るに、各々が、爻辞の意義を忠実に捉えつゝ、作者の見解とそれを補足し得る資料とを駆使して、教訓的な解釈をする。

初六の「堅冰至る」を、「順」と解している。この順は、増長の意で、善にせよ、惡にせよ積み重ねられた結果であると説く。

六二に「敬義」をもって「直方」を解き、「敬義立ちて徳孤ならず」といって、道德的確立の必要性を喝破している。上六に至るまで、或は謹慎で、或は中庸の徳をもって、或は謙讓をもってこれを釈している。そしてこの坤卦の文言伝は、前の乾卦の最終に記載された文言伝と同系統に属するものであると考えられる。

## (五)

以上文言伝の全文についてまことに雑駁な考察を加えてみた。その結果、前に述べた如く、(一)文体が必らずしも整理されていないこと。

(二)同一人、同一時代に制作されたものではないこと。(三)乾卦の文言伝の最初の部分「何謂也」「子曰」で語られる部分が、詳細で卦爻辞を正確に理解し、道德的に敷衍解釈していること。(四)各種の資料を使用して自説を補強していること。などが指摘できる。

これらを踏まえた上で、制作の基本姿勢を探ってみると。

本来の占筮の書としての性格からは逸脱したものではあつても、かなり完成された道德論であり、意義あるものとして昇華されている。

従って、文言伝制作の基本的姿勢は、当時大いに權威の認められはじめた易という神秘性を帯びた書物を借りて、勢力圏を拡大しつつあった自家の学説の宣揚と權威づけとをするのにあったのではないかと思われるのである。その学説は儒家系統のものであり、作者も複数の儒家の思想家であり、それを支持する占筮家達であったであろう。従って諸家の学説を求め、参考に資したであろう。

ただ、文言伝のみの雑駁な考察のもとに断ずることは危険であるし、十翼の他の各伝との比較もなされねばならないが、文言伝だけを見る限り、基本姿勢は前述の如くであり、その目的は道徳的社會の確立は勿論のこと、自家の安定勢力確保にあったように思える。實際その目的は達せられ、易が中国思想文学界に與えた影響は大きく、又「経」としての地歩を完全なものにしている。

注

- (1) 武内義雄「易と中庸の研究」(岩波書店刊)―象辞象辞の成立―参照。
- (2) 繫辞伝に「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、…於是始作八卦云」と。
- (3) 「元亨」は坤・屯・大有・蠱・臨・无妄・井・革・鼎などの各卦にある。皆、よく通ずるの意。「元亨利貞」とあるのは他には隨・亨の卦などにある。利貞も多く使われている。
- (4) 朱子「易本義」による。
- (5) 鈴木由次郎、全釈漢文大系本「易経」上(集英社刊)六八頁、補説参照。

- (6) 拙稿「中国思想と時間」国士館大学「漢学紀要」第二号。
- (7) 鈴木由次郎「易経」上・九七頁、補説参照。

(本学助教授・中国文学)